

## 珈琲店

2023. 8. 17

まだ、コロナ禍の最中に、福島のある珈琲店に家人と娘と3人で行った。たまたま入ったのではない。美味しい珈琲、味わいのある珈琲を求めて、その店を目指した。

店に入ると、元高校教師の店主が迎えてくれた。ここからが、大変だった。コロナのために、席と席の間隔を十分に取っていること、ご家族であっても会話をしないこと、時間制限があることなどの説明を受けた。テーブル席は撤去され、カウンター席のみだった。一瞬、やめようかという考えがよぎった。が、家人と目配せをして、お世話になることにした。我々3人は、ポツン、ポツンと席に着いた。

一人一人メニューを見る。いつもならば、みんなで何にするかの検討会をするところである。こうなると、家人と娘が何を頼もうが関係ない。好きなものをオーダーすればよい。もちろん、ストレート珈琲を所望した。

こんなシチュエーションは初めてである。コロナならではの状況である。さて、ここから3人はどんな行動に出るか。LINE である。これを使っての会話が始まった。「何を頼んだの」「ああ、やっぱり」「何だかおもしろいね」などなど、いつもよりも会話が弾む。声に出して話すよりも、コミュニケーションが進む。不思議である。

席が離れているため、一人なのだが、一人を楽しんでいるわけではない。程よく、時を過ごし、3人で店を出た。互いに笑うしかなかった。

先月、仙台に行った。美味しい珈琲を求めて、店を探した。当たりをつけて向かった。駐車場に車を入れようとすると、注意事項が目に入った。指示通りに車を止めた。すると、店主が現れた。さらに細かい指示をされた。嫌な予感がした。

すると、知人であっても、席を十分に離していること、会話はしないことなどの説明があった。「同じだ」あの福島の店のことが蘇った。この店は、まだコロナ禍のままだった。この店からは、絶対にコロナを出さないという気迫のようなものを感じたというよりは、店主の性格、気質の問題だった。こだわりと言えば聞こえはいい。

お店には、もう一人お客さんがいた。その方が帰ると、消毒作業が始まった。徹底していた。予想していた通りである。それにしても、すごかった。珈琲は、美味しかった。だが、珈琲の味わい以外のことが印象深く残ってしまった。度を超すと、興ざめである。とはいっても、店主がやっていることに間違いはない。事実、お客さんがやってくる。

私と家人はというと、また LINE での会話に花が咲いた。これはこれでよかった。おもしろかった。ここまでのこだわりのようなものがあるからこそ、珈琲も美味しいのであろう。また、同じような珈琲店に巡り合うかもしれない。それはそれで楽しみである。